

Principal Correspondence

「これからの学力像」

リリーベール小学校では三つの校訓のひとつに「創造」を掲げていますが、創造性とは簡単に言えば「課題解決能力」のことです。学習面に限らず、生活でも、運動面でも優秀な実績を残す子は「創造性」が高い。この能力こそ、これからの21世紀に求められる能力です。OECDの言う21世紀型学力といわれるものです。

一般的に、「課題解決」というと、あの手この手で課題をクリアする姿が目につくことでしょう。しかし実は「創造性」にはその課題解決の前に、**実に重要な「課題発見」というプロセスがあります。**「何が問題か」を発見する能力です。

20世紀までの教育では、学校でただ「問題」が与えられ、生徒はそれを解くことばかりを学び、「問題」そのものを設定するという授業はほとんどありませんでした。方程式を暗記し、課題を解くことが「学力」と考えられていました。もちろんそれはそれで大事な基礎ですが、高度に発達した情報社会ではそれではもう充分ではないということです。

普通、人がある事象を見て「これは問題だ。」と気づくのは、それまで自分が持っていた価値体系と矛盾する事象に出会うときと言われています。言い換えると、**様々な生活体験を豊富に積んで、感性の高い人に育てていくことが、問題発見能力を高めます。**悪い表現ですが、感性の鈍い人は問題を問題と気づく能力が低いのです。よって、**当校では野外体験学習(キャンプ)、芸術体験(コーラスや演劇、美術館見学)、豊富な校外活動(見学、職業体験)等、人間力や感性の向上を最も重要と考えています。**

実はここで感性教育と、学力が結びつくのです。



さらに独自の授業「創造論理」(5~6年生・週2時間)がそれを整理して論文にまとめる力、表現する力をサポートしています。

結びに、繰り返しになりますが、もちろんそれを支えるには中学年までの漢字や、計算の基礎学力の定着は大前提です。なぜなら文科省はこれを省いて、基礎学力無しに21世紀型学力を伸ばそうと「ゆとり」の時間を創って失敗したからです。

Principal Correspondence

オリンピックのレガシー(遺産)

今年はパリオリンピック！関心もさらに高まってきました。

オリンピックでは、選手が一定のルールの下で極限まで力を出して競い合う姿が、人々に感動と生きる活力を与えてくれます。オリンピックスピリットには「相手を尊敬し、フェアプレイで競い合い、勝っても負けても互いに称えあい、友情を結ぶ。」というようなことが書かれています。

1964年東京オリンピックのレガシーは新幹線や首都高速道路、競技場や、代々木体育館のような施設のハード面ではなく、それまで知らなかったようなスポーツを日本に紹介し、特に学校体育を盛んにし、根付かせたことでした。これにより飛躍的にスポーツが多様化しました。

2020年(実施は2021年)の東京オリンピックのレガシーは何でしょうか？

オリンピックの水泳のヘッドコーチ上野光司氏の講演をお聞きする機会があり現在の人材の育成法を知ることができました。

- ①良い成績が出たら、メダルが取れるかも知れないというようにあいまいで、はっきりと金メダルを狙わない人にはメダルは取れない。
- ②現在何が自分の課題で、それに対してどういう対処をしているかを言葉で表現できない人は、金メダルは取れない。
- ③身体の強化に加えて人間形成をやらなければ選手は長く続けられない。かの北島選手があれだけ長く選手を続けられたのは、マナー良く・課題を常に見つけ・努力を継続する人間形成もやってきて、人格が磨かれたからだ。

ということでした。それは何もスポーツだけには限らないことです。

人材だけが資源である日本の社会で、「人を育てていくシステム」こそが2020東京オリンピックのレガシーではないかと思えます。

それにしてもその人材育成システムで育った日本人選手のパリでの活躍は楽しみですね！

